

律子と貞子

太宰治

青空文庫

大学生、三浦憲治君は、ことしの十二月に大学を卒業し、卒業と同時に故郷へ帰り、徴兵検査を受けた。極度の近視眼のため、丙種へいしゆでした、恥ずかしい気がします、と私の家へ遊びに来て報告した。

「田舎の中学校の先生をします。結婚するかも知れません。」

「もう、きまつているのか。」

「ええ。中学校のほうは、きまつているのです。」

「結婚のほうは、自信無しか。極度の近視眼は結婚のほうにも差支えるか。」

「まさか。」三浦君は苦笑して、次のような羨やむべき艶聞えんぶんを語った。艶聞というものは、語るほうは楽しそうだが、聞くほうは、それほど楽しくないものである。私も我慢して聞いたのだから、読者も、しばらく我慢して聞いてやって下さい。

どっちにしたらいいか、迷っているというのである。姉と妹、一長一短で、どうも決心が付きません、というのだから贅ぜいたく沢な話だ。聞きたくもない話である。

三浦君の故郷は、甲府市である。甲府からバスに乗って御坂峠みさかとうげを越え、河口湖の岸を通り、船津を過ぎると、下吉田町という細長い山陰やまかげの町に着く。この町はずれに、どつ

しりした古い旅籠はたごがある。問題の姉妹は、その旅館のお嬢さんである。姉は二十二、妹は十九。ともに甲府の女学校を卒業している。下吉田町の娘さん達は、たいてい谷村か大月の女学校へはいる。地理的に近いからだ。甲府は遠いので通学には困難である。けれども、町の所謂いわゆるものもちは、そのお嬢さん達を甲府市の女学校にいられたがる。理由のない見識であるが、すこしでも大きい学校に子供をいれるという事は、所謂ものもちにとっては、一つの義務にさえなっているようである。姉も妹も、甲府女学校に在学中は、甲府市の大きい酒屋に寄宿して、そこから毎日、学校に通かよった。その酒屋さんと、姉妹の家とは、遠縁である。血のつながりは無い。すなわち三浦酒造店である。三浦君の生家である。

三浦君にも妹がひとりある。きょうだいは、それだけである。その妹さんは、二十。下吉田の姉妹と似た年である。だから三人姉妹のように親しかった。三人とも、三浦君を「兄にいちゃん」と呼んでいた。まず、今までは、そんな間柄なのだ。

三浦君は、ことしの十二月、大学を卒業して、すぐに故郷へ帰り徴兵検査を受けたが、極度の近視眼のために、不覚にも丙種であった。すると、下吉田の妹娘から、なぐさめの手紙が来た。あまり文章が、うまくなかったそうである。センチメンタル過ぎて、あまり、三浦君は少し閉口したそうである。けれども、その手紙を読んで、下吉田の姉妹を、

ちよつと懐しく思つたそうである。丙種で、三浦君は少からず腐つていた矢先でもあつたし、気晴しに下吉田のその遠縁の旅館に、遊びに行こうと思ひ立つた。

姉は律子。妹は貞子。之は、いづれも仮名である。本当の名前は、もつと立派なのだが、それを書いては、三浦君も困るだろうし、姉妹にも迷惑をかけるような事になるといけなから、こんな仮名を用いるのである。

三浦君が甲府からバスに乗つて、もう雪の積つている御坂峠を越え、下吉田町に着いた頃には日も暮れかけていた。寒い。外套の襟を立てて、姉妹の旅館にいそいだ。

途中で逢つたというのである。姉妹は、呉服屋さんの店先で買い物をしていた。

「律ちゃん。」なぜだか、姉のほうに声をかけた。

「あら。」と、あたりかまわぬ大声を出して、買い物物を店先に投げとばし、ころげるように走つて来たのは、律ちゃんではなかつた。貞ちゃんのほうであつた。

律子は、ちらと振り返つただけで、買い物物をまとめて、風呂敷に包み、それから番頭さんにお辞儀をして、それから澄まして三浦君のほうにやつて来て、三浦君から十メートルもそれ以上も離れたところで立ち止り、シヨオルをはずして、叮嚀にお辞儀をした。それから、少し笑つて、

「節子さんは？」と言った。節子というのは、三浦君の妹の名前である。

律子にそう言われて、三浦君は、どぎまぎした。なるほど、妹も一緒に連れて来たほうが自然の形なのかも知れぬ。なんだか、みんな見抜かれてしまったような気がして、頬がほてった。

「急に思いついて、やって来たのですよ。こんど田舎の中学校にとめる事になったので、その挨拶かたがた。」しどろもどろの、まずい弁解であった。

「行こ行こ。」妹の貞子は、二人を促し、さつきと歩いて、そうして、ただもう、にこにこしている。「久し振りね、実に、久し振りね、夏にも来てくださらなかったし、それから、春にも来てくださらなかったし、そうだ、ひどいひどい、去年の夏も来なかったんだ、なあんだ、貞子が卒業してから一回も吉田へ来なかったじゃないか、ばかにしてるわ、東京で文学をやってるんだってね、すごいねえ、貞子を忘れちゃったのね、墮落しているんじゃない？ 兄ちゃん！ こつちを向いて、顔を見せて！ そうれ、ごらん、心によましきものがあるから、こつちを向けない、墮落してるな、さては、墮落したな、丙種になるのは当り前さ、丙種だなんて、貞子が世間に恥ずかしいわ、志願しなさいよ、可哀想に可哀想に、男と生れて兵隊さんになれないなんて、私だったら泣いて、そうして、血

判を押すわ、血判を三つも四つも押してみせる、兄ちゃん！ でも本当はねえ、貞子は同情してるのよ、あの、あたしの手紙読んだ？ 下手だったでしょう？ おや、笑ったな、ちきしようめ、あたしの手紙を軽蔑したな、そうよ、どうせ、あたしは下手よ、おつちよこちよいの化け猫ですよ、あたしの手紙の、深いふかあい、まごころを蹂躪じゅうりんするような悪漢は、のろって、のろって、のろい殺してやるから、そう思え！ なんて、寒くない？ 吉田は、寒いでしょう？ その頸巻くびまき、いいわね、誰に編あんでもらったの？ いやなひと、にやにや笑いなんかしてさ、知っていますよ、節ちゃんさ、兄ちゃんにはね、あたしと節ちゃんと二人の女性しか無いのさ、なにせ丙種だから、どこへ行つたって、もてやしませんよ、そうでしよう？ それなのに、意味ありげに、にやにや笑って、いかにも他にかくれたる女性でもあるような振りして、わあい、見破られた、ごめんね、怒った？ 文学をやってるんですってね？ むずかしい？ お母さんがね、けさね、大失敗したのよ、そうしてみんなに軽蔑されたの、あのね、——」とめどが無いのである。

「貞子。」と姉は口をはさんだ。「私はお豆腐屋さんに寄って行くからね、あなた達さきに行つてよ。」

「豆腐屋？」貞子は少し口をとがらせて、「いいじゃないか。一緒に帰ろうよ。いいじゃ

ないか。お豆腐なんて、無いにきまつているんだ。」

「いいえ。」律子は落ちついている。「けさ、たのんで置いたのよ。いま買って置かなければ、あしたのおみおつけの実みに困こってしまう。」

「商売、商売。」貞子は、あきらめたように合点合点した。「じゃ、あたし達だけ、先に行くわよ。」

「どうぞ。」律子は、わかれた。旅館には、いま、四、五人のお客が滞在している。朝のおみおつけを、出来るだけ、おいしくして差し上げなければならぬ。

律子は、そんな子だった。しっかり者。顔も細長く蒼あおしろ白しろかった。貞子は丸顔で、そうしてただ騒ぎ廻まわっている。その夜も貞子は、三浦君の傍そばに付き切りで、頗すこぶるうるさかった。「兄ちゃん、少し瘦やせたわね。ちよつと凄味すしみが出て来たわ。でも色が白すぎて、そこんところが気にいらないけど、でも、それでは貞子もあんまり慾張りね、がまんするわよ、兄ちゃん、こんど泣いた？ 泣いたでしょう？ いいえ、ハワイの事、決死的きつてき大空襲たいくうしゅうよ、なにせ生きて帰らぬ覚悟で母艦から飛び出したんだって、泣いたわよ、三度も泣いた、姉さんはね、あたしの泣きかたが大袈裟きさで、氣障きざつたらしいと言ったわ、姉さんはね、あれで、とつても口が悪いの、あたしは可哀想あはれなな子なのよ、いつも姉さんに怒られてばっかりいる

の、立つ瀬が無いの、あたし職業婦人になるのよ、いい勤め口を捜して下さいね、あたし達だつて徴用令をいただけるの、遠い所へ行きたいな、うそ、あんまり遠くだと、兄ちゃんと逢えないから、つまらない、あたし夢を見たの、兄ちゃんが、とつても派手な^{かすり}紺の着物を着て、そうして死ぬんだつてあたしに言つて、富士山の絵を何枚も何枚も書くのよ、それが書き置きなんだつてさ、おかしいでしょう？ あたし、兄ちゃんも文学のためにとうとう気が変になつたのかと思つて、夢の中で、ずいぶん泣いたわ、おや、ニュースの間、茶の間ヘラジオを聞きに行きましよう、兄ちゃん今夜、サフォの話聞かせてよ、こないだ貞子はサフォの詩を読んだのよ、いいわねえ、いいえ、あたしなんかには、わからないの、でもサフォは可哀想なひとね、兄ちゃん知つてるでしょう？ なんだ、知らないのか。「やはり、どうにも、うるさいのである。律子は、台所で女中たちと共にお膳の後片付けやら、何やらかやらで、いそがしい。ちつとも三浦君のところへ話しに来ない。三浦君は少し物足りなく思つた。

あくる日、三浦君は、おいとまをした。バスの停留所まで、姉と妹は送つて出た。その途々、妹は駄々をこねていた。一緒にバスに乗つて船津までお見送りしたいというのである。姉は一言のもとに、はねつけた。

「私は、いや。」律子には、いろいろ宿の用事もあった。のんきに遊んで居られない。それに、三浦君と一緒にバスに乗って、土地の人から、つまらぬ誤解を受けなくなかった。おそろしかった。けれども貞子は平気だ。

「わかつてるわよ。姉さんは模範なお嬢さんだから、軽々しくお見送りなんか出来ないのね。でも、あたしは行くわよ。もうまた、しばらく逢えないかも知れないものねえ。あたしは断然、送って行く。」

停留所に着いた。三人、ならんで立って、バスを待った。お互いに気まずく無言だった。「私も、行く。」かす幽かに笑って、律子がしふや呟いた。

「行こう。」貞子は勇氣百倍した。「行こうよ。本当は、甲府まで送って行きたいんだけど、がまんしよう。船津まで、ね、一緒に行こうよ。」

「きつと、船津で降りるのよ。町の、知ってる人がたくさんバスに乗っているんだから、私たちはお互いに澄まして、他人の振りをしているのよ。船津でおわかれする時にも、だまって降りてしまうのよ。私は、それでなくちゃ、いや。」律子は用心深い。

「それで結構。」と三浦君は思わず口を滑らせた。

バスが来た。約束どおり三浦君は、姉妹とは全然他人の振りをして、ひとりずつと離れ

て座席にすわった。なるほど、バスの乗客の大部分はこの土地の人らしく、美しい姉妹にいんぎん 慇懃な会えしやく 釈をする。どちらまで？ と尋ねる人もある。

「は、船津まで、買物に。」律子は澄まして嘘うそを吐いている。完全に、三浦君の存在を忘れているみたいな様子だ。けれども、貞子は、下手くそだ。絶えず、ちらちらと三浦君のほうを見ては、ぷつと噴き出しそうになって、あわてて窓の外を眺めて、笑いをごまかしている。松の並木道。坂道。バスは走る。

船津。湖水の岸に、バスはとまった。律子は土地の乗客たちに軽くお辞儀をして、静かに降りた。三浦君のほうには一瞥いちべつもくれなかつたという。降りてそのまま、バスに背を向けて歩き出した。貞子は、あわてそそくさと降りて、三浦君のほうを振り返り振り返り、それでも姉の後に附いて行つた。

三浦君のバスは動いた。いきなり妹は、くるりとこちらに向き直つて一散に駈けた。バスも走る。妹は、泣くように顔をゆがめて二十メートルくらい追いかけて、立ちどまり、「兄ちゃん！」と高く叫んで、片手を挙げた。

以上は、三浦君の羨やむべき艶聞の大略であるが、さて問題は、この姉と妹、どちらにしたらいいか三浦君が迷っているという事にあるのだ。

三浦君は、私にも意見を求めた。私ならば一瞬も迷わぬ。確定的だ。けれども、ひとの好ききらいは格別のものであるから、私は、はつきり具体的には指図さしずできなかつた。私は予言者ではない。三浦君の将来の幸、不幸を、たつたいま責任を以て教えてあげる程の自信は無い。私は、その日、聖書の一箇所を三浦君に読ませた。

——イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。その姉妹にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言みことばを聴きをりしが、マルタ饗応もてなしのこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」主、答へて言ふ「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により思ひ煩こころづかいひて心こころ勞づかいす。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此これは彼より奪ふべからざるものなり。」
(ルカ伝十章三八以下。)

私は、ただ読ませただけで、なんの説明も附加しなかつた。三浦君は、首をかしげて考えていたが、やがて、淋さびしそうに笑つて、「ありがとう。」と言つた。

けれども、それから十日ほど経つて、三浦君から、姉の律子と結婚する事にきめました、という実に案外な手紙が来た。なんとという事だ。私は、義憤に似たものを感じた。三浦君

は、結婚の問題に於いても、やっぱり極度の近視眼なのではあるまいか。読者は如何に思
うや。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：高橋真也

2000年4月1日公開

2005年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

律子と貞子

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>